

日本農業新聞で紹介された【イネファイター】

日本農業新聞(2014年12月22日)の記事に、稲のエンドファイト(植物共生細菌)資材「イネファイター」(前川製作所)が紹介されました。

日本農業新

(第3種郵便物認可)

前川製作所
(東京)



エンドファイトの研究、商品化に力を入れている(東京都江東区で)

産業用冷凍機などを製造・販売している前川製作所は、稲のエンドファイト(植物共生細菌)資材「イネファイター」や鮮度保持技術の普及に力を入れている。

エンドファイトは植物細胞の隙間に共生する病原菌以外の微生物の総称で、宿主植物に病害抵抗性や乾燥などの環境ストレスに対する抵抗性を与え、成長を促進する。

同社は2000年から効果があるエンドファイトを探してきた。その結果、コブノメイガ類の食害、いもち病の感染が少なくなるなど、稲の病害虫被害を抑え、免疫を強くする細菌、アンスピリラム属菌を見つけた。05年から北海道のJ Aびばいなどと協力し、稲、大豆やタマネギでも効果を試験してきた。

微生物で作物強く 稲を収量増 稲を収量増 稲を収量増

08年に稲用を「イネファイター」として製品化し、北海道で試験販売した。12年に全国販売し、13年には体制を整備し販売を本格化させた。14年には1500社に普及している。これまでに31品種を対象に効果を確認。稲の茎数が増え、穂数も増え、10%前後増収する。

使い方は、製剤を水で薄め、移植2〜10日前に育苗箱に散布する。生きている菌を製剤化しているため、保管には冷蔵庫が必要。使用期限は製造日から1カ月以内だったり、水道水は前日にのみ置きして塩素を抜く必要があったり、注意しなければならない点がある。現在、使用期限をもっと長期化できないか、研究を進めている。

同社は「一般的に農薬や肥料は散布すると徐々に効果が薄くなるが、イネファイターは一度散布すると植物体の中で増えてじわじわ効いてくる」と強調する。農水省のホームページの「担い手農家の経営革新に資する稲作技術カタログ」に取り上げられるなど、新技術として認められつつある。

現在は慣行の施肥量で使っているが、養分不足になる恐れがある。農業試験場と連携し最適な施肥量を検討している。農家との連携で栽培したところ、食味値を大幅に高めることにも成功した。

今後はタマネギ、キャベツ、小松菜、チンゲンサイ、レタスを中心にした商品の開発も進め、野菜用エンドファイト剤を発売する。増収効果を確認しており、施用試験に協力してくれる農家を求めている。

■会社概要=1924年前川商店創業、30年製氷・冷蔵事業を開始。食品分野では食肉加工ロボットを製造販売する

■所在地=〒135-8482 東京都江東区牡丹3の14の15、☎03(3642)8181

会社 フォーカス

- イネファイター [50ml/500ml]
 - イネファイター(有機栽培用) [50ml/500ml]
- 有機 JAS 対応資材